

ラテン・アメリカ社会科学研究センター

El Centro Latinoamericano de Investigaciones en Ciencias Sociales

リオデジャネイロを訪れた人なら、砂糖パン (Pão de Açúcar) の山は行ったことがあるだろう。その山の下一帯がブラジル大学を中心とする大学地区である。ここに紹介するラテン・アメリカ社会科学研究センターは、この大学地区の一角にある。

I 設立と目的

ラテン・アメリカ社会科学研究センターは、1957年にユネスコの援助を得てラテン・アメリカ20カ国の政府によって創立され、ブラジルの1957年7月6日付け命令第41,657号に基づいてブラジルにおいてその活動を開始した。

センターのおもな目的は、つぎのとおりである。

- (1) ラテン・アメリカ地域に共通な社会経済問題の研究を促進し調整すること。
- (2) ラテン・アメリカにおける社会科学研究者と研究機関のあいだの連絡を保つこと。
- (3) ラテン・アメリカ地域における実態調査を行ない、これを奨励し、社会科学における域内の文献サービスを確立すること。

II 運 営

このセンターの全般的な方針とその総合計画は、理事会 (Comité Diretor) の責任である。理事は、加盟国によって選出された域内の著名な社会科学研究者である。所長 (Diretor) は、この理事会から選出され、センターの運営とその総合計画に責任をもつ。研究員は、主としてラテン・アメリカから派遣され、専門の研究プロジェクトの指導と実施を担当する。このほか、定期的にヨーロッパとアメリカ合衆国から訪問研究員を受け入れ、研究の協力を行なっている。

センターは、非営利団体であり、資金は加盟諸国の年間拠出金、ユネスコとブラジル政府の特別贈与金のほか、政府機関、政府・民間財団および研究機関との契約金やその贈与金によって調達されている。

III 研究計画

センターの総合研究計画は2年ごとに立案され、その大わくのなかで専門研究プロジェクトが作られるが、その理論的範囲、地理的範囲それにプロジェクトの実施期間はさまざまである。プロジェクトは大半がセンターのイニシアティブで決められるが、あるものは外部の研究機関の専門的な要請に応じて作られる。プロジェクトによっては、内容がラテン・アメリカ一帯に及ぶものがあったり、比較研究の性格をもつものがあるが、その場合は、それぞれの部分を現地の大学や研究機関との共同で行なう。そのほかは、一国単位か一国の特定地域である。いずれの場合にせよ、センターの窮極的目標は、ラテン・アメリカ地域の全般的・比較的知識に寄与し、さらにラテン・アメリカを研究分野としている社会科学研究者の努力をできるかぎり調整することである。

IV 活 動

センターの活動としては、ラテン・アメリカ社会科学図書館のサービスとその文献サービスがあげられる。その目的は、この分野における「手形交換所」の役目を果たすことにある。また、季刊の *Boletín* は現在 *América Latina* に変わり、学術雑誌として論文、ニュース、書評、抄録などを掲載している (アジア経済研究所の *The Developing Economies* と交換中)。他の刊行物としては、ラテン・アメリカにおける社会科学の研究状況 (国別) に関するもの、社会科学研究機関の便覧がある。センターには、ラテン・アメリカ地域における社会科学研究者、研究機関、研究進行状況のファイルが備えられており、つねにアップ・ツー・デートなものにされている。また、ラテン・アメリカにおける社会情勢に関する年報報告、農地改革、都市化、社会成層などに関するビブリオグラフィを出版している。またセンターは、ラテン・アメリカ各国の研究機関と協定を結び、それぞれセンターの連絡員としての役目を果たしている。最近の活動と



ラテン・アメリカ社会科学センター

しては、1959年10月にリオデジャネイロで行なわれた「社会変動に対する抵抗」(Las Resistencias al Cambio Social)に関する会議があるが、これには49名の専門家が参加した。1962年6月には、センターとパン・アメリカン・ユニオンの共同主催で、「社会の構造、成層、および変動に関するセミナー」(Seminario sobre Estructura, Estratificación y Movilidad Social)が行なわれたが、これにはラテン・アメリカ、ヨーロッパ、アメリカ合衆国から35名の研究者が参加した。

ラテン・アメリカにおいてさえ、ラテン・アメリカに関する研究はきわめて粗雑である。そこでセンターは、ラテン・アメリカ各国と域外各国から若い研究者や大学の学生を招へいして実地訓練を行なうことがいかにして可能かを検討している。したがって、センターは、これに関心のある人々や研究機関の照会を歓迎している。また、この目的のために奨学金の設置も計画中である。

V 研究プロジェクト

これまで実施されたセンターのプロジェクトには、つぎのものがある。

(1) 「社会の成層と変動」(Estratificación y Movilidad Social)

このプロジェクトは、ブエノスアイレス、モンテビデオ、リオデジャネイロおよびサンチャゴで行なわれ、センターの監督のもとに現地調査団が必要なデータを収集した。データ処理と比較分析は、センターの研究者によって行なわれた。この研究はさらに拡大して4ないし5のラテン・アメリカの他の都市で実施する計画をもっている。

(2) 「教育と経済発展」(Educación y Desarrollo Económico)

アルゼンチン、ブラジル、チリ、ハイチ、パナマ、ペルーおよびベネズエラの専門家が、センターとの契約のもとに、それぞれの国におけるこの問題に関する報告書を作成する。ブラジルほかいくつかの国に関する研究はすでに終了し刊行された。さらにこの研究に他のラテン・アメリカ諸国についても行なわれる予定である。

(3) 「中央アメリカにおける土地所有」(La Tenencia de la Tierra en América Central)

この広範なプロジェクトは、コスタリカにある中央アメリカ社会研究所(Instituto Centroamericano de Investigaciones Sociales)の後援で行なわれたが、これにはセンターの研究者1名が参加した。

(4) 「ブラジルにおける農業構造」(La Estructura Agraria del Brasil)

この目的には、ブラジル農村社会局(Serviço Social Rural do Brasil)がセンターに研究費を寄付し、その援助をもって農業構造に関する研究がブラジルで問題の多い東北部各地で実施されている。このプロジェクトには現地の大学や研究機関が多く参加している。1963年にはブラジルの他の地域にまで広げられた。

(5) 「大学生のイデオロギーと抱負」(La Ideología y las Aspiraciones de los Estudiantes Universitarios)

この比較研究プロジェクトは、エクアドル、ペルーおよびウルグアイで始められ、さらに他のラテン・アメリカ諸国についても実施された。ラテン・アメリカの社会・政治発展における大学の重要性にかんがみ、センターはユネスコとの共同作業でとくに比較研究的性格に重点を

おいている。

(6) 「人種不融合と土着集団の国内社会への統合」
(Fricciones Interétnicas y la Integración de los Grupos Indígenas a la Sociedad Nacional)

ラテン・アメリカ人類学の新しい課題に関する総合計画の一部として、このプロジェクトには、ブラジル、ペルー、パラグアイおよびボリビアにおける日本移民、およびブラジルおよびペルーにおけるインディオの国内統合過程に関する研究が含まれている。インディオの人口が一つの社会問題となっている国については、後者の研究はさらに広げられる。

その他の活動で、センターが参加しているものは、リオデジャネイロにおける社会階級と疾病状態の関係に関する研究、実態調査の方法についての学生の訓練などである。これらは、ブラジル各大学で行なわれる実態調査プロジェクトに対するセンターの研究員の協力を通じて実施される。

現在計画段階にあるものは、ラテン・アメリカにおける農業改革の社会的効果の比較分析、ブラジリアの発展の研究、農村地帯における石油産業開発の効果の研究、その他である。センターは、その研究活動には固定的な制限を行なわない。問題が起り、それを研究する予算があれば、新たにプロジェクトを実施する。

VI 筆者の印象

コネスコの援助でラテン・アメリカに設けられた機関としては、このほかにサンチャゴ(チリ)のラテン・アメリカ社会科学単科大学(Facultad Latinoamericana de Ciencias Sociales, 略称 FLACSO)があり、センターとは姉妹機関になっている。また、センターの類似機関には、ニューデリー(インド)の南アジアに関する研究センター(UNESCO Research Centre on Social and Economic Development in Southern Asia)がある。

センターの特色としては、人類学的・社会学的研究をあげることができよう。ちなみに、所長のマヌエル・ディエグス・ジュニオール(Manuel Diégues Júnior)教授は人類学専攻であり、以下の研究員も社会学・人類学出身者が多い。マヌエル・ディエグス・ジュニオール所長は、現在筆者が籍をおくりオデジャネイロ・カトリック大学(Pontificia Universidade Católica do Rio de Janeiro, 略称 PUC)の教授で、ブラジルにおける社会科学の開拓者の1人として世界に知られている。センターの異色といえようか、ここには日本の二世である

ユタカ・スギヤマ(Iutaka Sugiyama)研究員がいる。かれもリオデジャネイロ・カトリック大学出身で社会学を専攻している。筆者が訪問した節は、かれの案内で、所長に面会することができた。所長がセンターの概要を話され、あとは、スギヤマ研究員がセンター内を案内してくれた。アジア経済研究所の内容も所長以下各研究員にかなり詳しく質問されたので、それに答えたが、その規模にはみなびっくりしていた。とくにこのスギヤマ研究員は将来アジア経済研究所と密接な連絡を保ちたい旨の申し出をされたので協力を約した。かれは現在アメリカのテキサス大学ラテン・アメリカ研究所(Institute of Latin American Studies, University of Texas)の招いで同研究所で研究中であるが、帰国後はアジア経済研究所の*The Developing Economies*に「ラテン・アメリカにおける産児制限と経済発展」(仮題)という論文をポルトガル語か英語で投稿したいと言っていた。アメリカのウィスコンシン大学(University of Wisconsin)から派遣された若いマイケル・サンド(Michael Sund)研究員も一生懸命、実態調査の数字の整理をしていた。かれもアジア経済研究所にはかなり興味をもったらしく熱心に筆者の話をタイプに打っていた。

とにかく、研究員はみな若く、センターの未来の可能性を象徴している。

(海外派遣員 桜井雅夫)

— 在リオデジャネイロ —